

# 直方ミニバスケットボールクラブだより

ミニバス  
共育コラ

良質な「遊び」 = 「学び」の機会として



## 「遊び」 = 「学び」

子どもの成長、発達(身体的、精神的、知的発達など)を促すのは、乳幼児期から思春期、いわゆる「子ども時代」の「遊び」です。子どもにとって「遊び」=「学び」です。「よく遊ぶ子」=「よく学ぶ子」と言われます。

運動機能の発達は脳の発達を促し、脳の発達は運動機能の発達につながります。今の子どもの動きを見ていると、心配になることがあります。クラブ活動で言えば、「歩き方、走り方、跳び方、降り方、倒れ方、こけ方、投げ方、とり方など」です。競技としてのバスケットボールの技能を身につける前に、人としての運動機能の発達を促すことが必要になっています。そのことと同時並行でバスケット技能を身につける練習内容を考えなければならないのが現状です。昔の子どもでいえば、「遊び」のなかで身につけていたところです。そこが身につけている前提で指導をしていたら、今はまったくたちゆきません。無理してそのままやれば、けがも多くなるし、バスケットを楽しめるようになる前に続けることができなってしまう。

このような状況を生み出している要因は、一言で言うと社会の変化ですが、そのなかにはさまざまなものがあります。その一つに子どもの「遊び」の変化があります。

## 「遊び」 ≠ 「遊び」(遊びの変化)

今の子どもの問題は、「遊び」がデジタル化された機器のなかでするゲームやネット動画などによるものから生じているものが多々あると思います。つまり「遊び」方が変わってしまって、脳を発達させる「学び」に至らないものになっているということです。知識や情報に多く触れることは簡単にできますが、思考力や判断力等を高めるものにはなっていないということです。

スマホやパソコンなど、今の時代、これからの時代、いずれは使えるようになっておかなければならないものですが、使い方や頻度に自己規制をかける力を身につけていない子どもに、それをフリーハンドで持たせることがいかに危険かということは言うまでもありません。思春期前までのデジタル機器の長時間使用は、子どもの成長、発達によくないと、すでに医療界からも赤信号がとまり始めています。

「遊び」=「学び」と言っているのは、身体を使った遊び、子どもたちが群れて遊ぶこと、この過程で、身につけることができるさまざまな学力の土台のことを言っています。

## 身体的機能の発達⇒知的発達⇒精神的発達

身体を使って遊ぶことで、体力や運動機能の発達が促されます。子どもたちが群れて遊ぶことで、けんかやトラブルも含めて、すったもんだしながら、人とのコミュニケーション力やつながりを育む力（協調性、自制心、忍耐力）、いわゆる社会性を身につけることができます。これらは、「非認知能力」といわれ、自他を大切にできるようになる、とても重要な力（学力）です。

学力が、教科の学力でイメージされることが多いですが、実は、その土台となっている「遊び」「体験」「社会性」「非認知能力」などで培われる学力がとても重要です。さらに言えば、その過程で身につける「自尊感情」（自分のことが好き、自分のことを大切に思える気持ち）と「自律の力」（自分のことを自分で考え、選択、判断、決定し、行動する力）がとても重要です。

これらを育むことができる良質の「遊び」を通して、いろいろな「ひと」「もの」「こと」への知的好奇心が湧いたり、日々の生活に前向きになり、もっと知りたい、わかりたい、できるようになりたいなどの学習意欲につながったりして、学力の土台が築かれていきます。

### 良質な「遊び」の場の一つとして

私自身、以前は、「遊び」の重要性を訴えつつ、日常的に「クラブ活動」を行っていることに対して矛盾を感じていました。日常的にクラブ活動を行うことで、むしろ子どもの「遊び」＝「学び」の機会を奪ってしまっているのではないかと。

しかし、今、子どもたちをとりまく状況、とりわけ「遊び」の変化を見るにつけ、むしろ、日常のクラブ活動の時間が、子どもたちにとって「遊び」＝「学び」の機会になっていると考える方が、現状にあっているのではないかと思うようになってきました。

単なる強いチームづくり、優秀な選手の育成、そのための管理強化、指導強化というようなクラブではなく、子どもにとって良質な「遊び」＝「学び」の機会となるような活動をつくっていきたいと思っています。そのことで、昔の子どもたちの身体を使った遊びで獲得していた力、群れて遊ぶことで身につけていた力を、このクラブで育てていくことができればと思っています。

